

芭蕉、清風歴史資料館（鈴木弥兵衛家住宅）

有名な俳人、松尾芭蕉（1644～1694 年）は、1689 年、江戸（現在の東京）から日本の北部地方まで、156 日間で約 2,400 キロメートルを旅しました。芭蕉は、弟子の河合曾良（1649～1710 年）とともに、ほとんどの道のりを歩いて旅しました。2 人の旅は、芭蕉の最も有名な作品のひとつである旅行記「おくのほそ道」（北の奥地への狭い道）の題材となりました。旅の途中で 2 人は尾花沢に立ち寄り、芭蕉の友人で清風の名で知られる裕福な商人・鈴木清風（1651～1721 年）を訪れました。芭蕉と曾良は尾花沢に 10 泊し、3 日間は清風宅で清風のもてなしを楽しみ、残りの 7 日間は養泉寺で過ごしました。

芭蕉、清風歴史資料館は、芭蕉と清風間の長く続いた友情と、芭蕉の「おくのほそ道」の旅の遺産を記念したものです。展示品には、清風にかかわる資料、芭蕉自身が書いた手紙、芭蕉の『奥の細道』の旅にかかわる尾花沢に関する資料などがあります。資料館の 2 階では、道具や衣服、またその他尾花沢の厳しい冬の暮らしにかかわる遺物を展示しています。

この資料館は、江戸時代（1603～1867 年）後期の酒商人のもので、清風宅そばの現在地に移築したものです。資料館の入り口には当時を思い起こさせる格子戸があり、土間の通路が続いています。